

# 将来必要になる力から逆算し 今、実践すべき教育を考える

玉川大教職大学院教授、国立教育政策研究所名誉所員 小松郁夫

社会が変われば、小学校に求められる教育も変化する。10年後、20年後を考えた時、社会の変化に合わせて小学校教育はどのように変わっていくべきなのか。今後求められる指導について、玉川大教職大学院の小松郁夫教授に聞いた。

## 本来の小学校の役割と現状の課題

### 経済・政治・社会的役割を 果たすための力を付ける

これからの小学校教育を考える前提として、社会の変化に左右されない、学校本来の役割は何かを整理することから始めましょう。私は「経済的役割」「政治的役割」「社会的役割」の3つであると考えます。

経済的役割は、子どもに就業能力を育てることです。学校は、経済状況や産業構造の絶え間ない変化を捉え、それを教育に反映させ続けなければなりません。例えば、特に創造力が求められる社会であれば、その土台となる力を小学校の段階から育てる必要があるの

です。

政治的役割は、社会に出るまでの準備段階として、子どもに政治や社会の仕組み、憲法などについて教え、政治に関心を持ち、参画していく能力を子どもに育むことです。

そして、社会的役割は、文化やスポーツなどの人生を豊かに過ごすための素養を育てることだと考えます。

しかし、現在の学校の状況に目を向けると、社会の急速な変化が1つの背景となり、これらの役割を十分に果たしきれない部分があるように思います。

例えば、少子化による学校の小規模化が進行し、1学年1学級の学校が増えているという現状があります。学校の統廃合も進んでい

ますが、地域から小学校がなくなることへの住民の不安などもあり、統廃合をして学校規模を保つという選択はしにくい場合もあります。小規模化が問題なのは、集団による学びのスケールが小さくなり、多様な価値観の中で考えを深める力を育成しにくくなるからです。こうした実態を踏まえた新しい学び方を考える必要があります。

次に、地域差はありますが、教師の若年化が急速に進んでいます。経験の浅い教師が増えることで、教育の質に影響が出る可能性があります。一方で、若手の先生は新しいことに挑戦する意欲が強い傾向にありますから、転換期を迎えた現在の小学校教育にとってはプラスに働くのではないかと、私は考えています。

また、「学び合い」などでグループ学習を取り入れることが増えてきましたが、まだまだ教師の指導が主体の一斉授業が中心です。欧米では座れるように床がカーペットだったり、机にキャスターが付いたりして、子ども同士がグループ学習をし、コミュニケーションを取りやすいスタイルが主流になっています。社会全体が義務教育に対して画一性や公平性を求めているため、学校や自治体が独自性を発揮しにくいという現状もあります。ICT機器や設備面を整備し、学びの目的に応じて柔軟に授業を組み立てられる環境を整えるべきだと考えます。

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

これからの小学校に求められる指導

子どもが互いの多様性を尊重し  
学び合える指導を

現状と今後の社会の変化を踏まえ、これからの学校にはどのような指導が求められるのか、改めて考えてみましょう。

グローバル化や高度情報化といった昨今の社会の流れを考えると、それらの知識を基盤とした「考える力」を育む指導がより強く求められているのは自明です。それは新学習指導要領にも記されています。端的に言えば、求められる指導が「量」的なものから「質」的なものへと変化しているのです。



こまつ・いくお◎国立教育政策研究所高等教育研究部長 早稲田大学大学院客員教授 イギリス・パーミンガム大教育学部客員研究員などを経て現職。専門は学校経営学、教育行政学、学校論、文部科学省「学校評価の推進に関する調査研究協力者会議委員・副座長なども歴任。著書に『新しい公共型学校づくり』（共著・ぎょうせい）など

例えば、出来事の年号を覚えるよりも、その出来事が歴史の中でどのような意味合いを持つかを考えさせるなど、歴史的な見方をより重視する授業があってもよいでしょう。欧米では、算数の授業で電卓を使ってよいとする設問があります。計算力を鍛えるのではなく、考える力を育てるのがねらいであれば、そうした指導の方が効果的な場合もあるでしょう。

今の小学生が社会に出る頃には、ますますグローバル化が進み、異なる文化や価値観を持つ人と協働する場面が増えるでしょう。そうした社会を生きる力を付けるために、自ら考える力を育て、基礎・基本をしつかり習得

させることは重要です。しかし同時に、子ども一人ひとりの違いに目を向け、考えさせたり表現させたりする指導にも力を入れる必要があります。

新学習指導要領では、言語活動などを通して、子どもが伝え合う活動が重視されています。しかし、同じ内容を同じ方法で学ぶだけでは、子ども同様に「伝える」必然性が生じません。違いや個性を意識させてはじめて「自分の考えを伝えたい」「相手の考えを聞きたい」といった欲求が生まれます。そのようにして異なる考えが刺激し合うことで、1+1から2以上のものが生み出されるのです。

将来から逆算して考える  
「バックキャスト」の思考

日本では昔から教科の編成が変わっていません。しかし、現代では、学問や知識、技術が統合的になっていきますから、思い切った教科を再編するという視点も必要ではないでしょうか。例えば、イギリスや韓国の小学校ではICTが必須教科であり、職業技能としても重視されています。このままでは日本が世界から取り残されてしまう危険性も否定できません。

社会が大きく変化しつつある今こそ、学校に求められるのは、先に将来の環境を想定して目標を設定し、今、何をすべきかをさかのぼって考える「バックキャスト」の思考です。

\*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

目の前にいる子どもが社会人となる10年後、20年後の世界を考え、その頃に必要になる力を想定して教育内容を組み直していくことが必要であると、私は考えています。

## 家庭・地域との連携

### 家庭・地域とのつながりを「支援型」から「協働型」へ

教育内容の変化によっては、学校だけでは出来ない活動も増えますから、今後は家庭や地域との連携がますます重要になるでしょう。最近、「家庭や地域の教育力が落ちた」と言われるのを時々耳にしますが、私はそうは思いません。ただ、学校から「子どもにどのような力を付けたいのか」という見通しが示されていないため、家庭も地域もどのように動いたらよいか分からないのではないのでしょうか。だからこそ、学校が家庭や地域とデジタルを共有して、共に子どもを育てていく意識を持つことが大切だと思います。

家庭・地域とのつながりには、「支援型」「連携型」「協働型」の3つのレベルがあると考えています。

「支援型」は、家庭や地域が「サポーター」となっている状態です。この段階では、学校が保護者や地域住民にお願いし、さまざまな協力を受けることとなります。家庭・地域の側は「学校と共に子どもを育てる」という意

識が希薄なため、協力を求められることが多いと「学校からお願えばかりされている」という不満が募るかもしれません。現状では、多くの学校がこの支援型にあるのではないのでしょうか。

それより一歩先に進み、学校と家庭・地域がデジタルを共有し、それぞれの役割を自覚しながら協力し合うのが「連携型」です。例えば、「元気にあいさつの出来る子どもを育てよう」という目標を立て、学校と家庭・地域がそれぞれ出来ることに取り組むような状態といえるでしょう。

最終的に目指したいのは、学校と家庭・地域がコラボレーションをする「協働型」です。この段階になると、協働によって教育を「共創（きょうそう）」することで、新しい教育の形が生まれることが期待できます。例えば、地域の企業に積極的に協力してもらおうことで、学校だけでは出来ない、社会を知る学習活動が作り出せるかもしれません。

### 教師本来の役割を意識し 学校外の力を活用する

このように、家庭や地域との関係を発展させていくためには、「教室で子どもと向き合う」という教師の本来の仕事を残し、それ以外は良い意味で従来の学校の形を崩して、学びの場を広げていく意識を持つとよいでしょう（図）。例えば、外国語活動は地域のサポー

ターに、ICT教育はコンピューターの専門家に任せる、家庭科の授業に地域の高齢者に入ってもらふことなどが挙げられます。テストや補助教材などは、全国展開によってスクールメリットを生かして作成している外部業者の力を借りるのもよい方法でしょう。

また、ICT化の進展により、以前と比べて子どもや保護者とのコミュニケーションの取り方も変わりました。携帯電話やメールによって瞬時に大勢の人とつながれるのはメリットの1つでしょう。一方で、こうしたICT化や既製教材の充実などにより、教師と子ども・保護者の関係が希薄化しやすくなっていることを危惧しています。

例えば、保護者が何か用事で学校に来たとしましょう。普段は電話で話すことが多くても、「せっかくだから、お子さまの様子を見ていきませんか」と教室まで案内するような心配りをすれば、学校への信頼は増していくでしょう。便利なものは活用しつつも、温もりがあり、顔が見えるつながりを大切にします。子どもとも保護者とも、人間関係を直接構築していくことが大切なのです。

日本でも警備や給食などの分野で民営化が進んでいます。イギリスでは昼食の指導員や昼休みのグラウンドの監視員なども人員をパートで雇い、教師はゆっくり昼食をとっています。こうした方法でも、教師の多忙さを多少軽減できるかもしれません。

# 新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

家庭との連携では、学校が家庭学習にいかにかかわるかも考えなくてはなりません。分らないことは自分で調べ、工夫して学習する家庭での自学自習は、学習塾とは異なる大切な学習活動です。小学校の時から自ら学ぶ子どもを育てるために、家庭と学校が十分に連携する必要があります。

## 先生方への期待

### 縦と横の2つの視点を持ち 教育界の外側に目を向ける

今後の学校教育を考える上で、校長を始め管理職の立場にある先生には、「縦」と「横」の2つの視点を持つていただきたいと思えます。縦の視点は、日本や世界がどのように変化しているかを、過去から現在、未来へと続く「歴史的な視点」を持ち、知識として学ぶことです。そして、横の視点は、海外での旅行や生活を体験したり、グローバルな情報を獲得したりして、狭い世界にとどまらず、「比較的な視点」を持つことです。

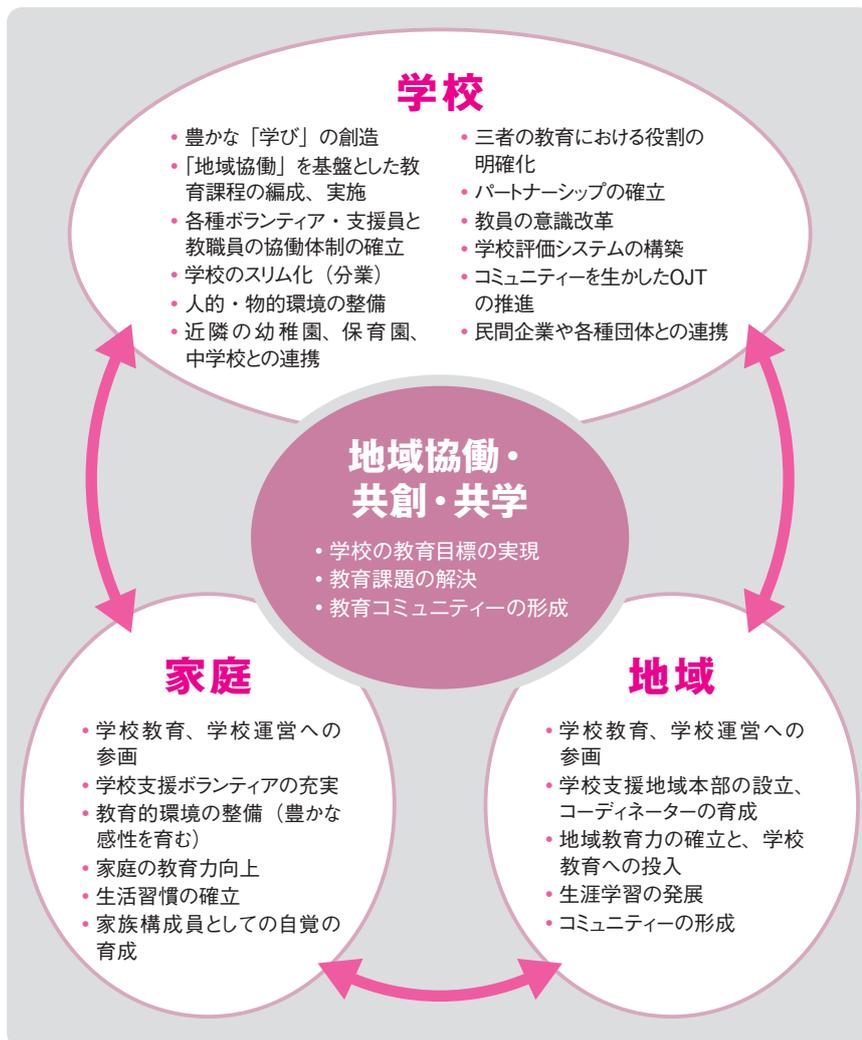
教育界そのものは限られた世界ですが、家庭や地域を通して、多くの人や業界に接することが出来ます。内向きにならずに外に意識を向ければ、さまざまな世界につながるネットワークを持てるのが、教師という職業です。教師自身が多様な価値観を受け入れることで、子どもの見方や指導も多様になります。

教師が変われば、子どもが将来、多様な価値観が混じり合うグローバル社会を生き抜ける下地も育まれるでしょう。

また、若手教師が新しい活動に挑戦することを支えるのも、管理職の重要な役割です。我々大学も、教師を育てる立場として、これからの時代に合った新しい指導法をしっかりと身に付けさせて現場に送り込みたいという気持ちで取り組んでいます。

教師の面白さは、いろいろな世界に羽ばたく子どもの準備期間に携われることです。自分の育てた子どもたちが、10年後、20年後に世界で活躍することを考えれば、教師が素晴らしい仕事であると改めて感じるのではないのでしょうか。世界とつながり、未来をつくり出す仕事であることに誇りを持ち、その面白さを積極的に享受することも、より良い教育の体現のために大切なことだと思います。

## 図 新しい学校運営の創造



\*小松先生の資料を基に編集部で作成